

十卷本『説文解字篆韻譜』所據の 切韻系韻書について

工 藤 早 恵

はじめに

南唐・徐鍇編纂、北宋・徐鉉増訂『説文解字篆韻譜』（以下『篆韻譜』）は、その増訂時に李舟『切韻』（佚書）を利用した事が知られている。しかし、この書の傳本である十卷本と五卷本のいずれが徐鉉の増訂本で李舟『切韻』の姿を窺い知ることのできるものなのかということについては、検討の餘地のあるところである。このため従來の研究は、主に兩傳本の關係を明らかにすることに重點を置いて行われてきた。

清・王國維は「李舟『切韻』考」において、十卷本は徐鍇の原本、五卷本は徐鉉の増訂本であるとし、これが長い間定説のようにになっていたが、近年になって小川環樹博士がこれに反論を唱え、十卷本の段階で既に徐鉉の増訂を経ており、五卷本はこれに後人が更に『廣韻』を用いて増補したものだという説を提出した。これに對して、拙稿1987、1990では兩傳本の被注字、反切、義注について、大徐本『説文』および『廣韻』と比較作業を行い、その結果やはり基本的には王國維説に據るべきであることを指摘した。

しかし、これで『篆韻譜』の傳本成立過程に關する研究が充分なされたとは言い難い。これまでは兩傳本間の相違點に注目して、どの段階で増補改訂がおこなわれたのかを考察してきたが、今後は李舟『切韻』あるいはその他の資料をどのように用いたのかというような増補改訂の具體的な狀況について、更に研究を深める必要がある。そしてそのためには、まずその基礎作業として十卷本の性格を明かにすることが必要だと思われる。そこで本稿では、十卷本が據った韻書の切韻系韻書における位置を確認し、あわせてこの傳本の反切用字に見られる傾向等を紹介する。

1. 従来の研究

王國維説に従って十卷本が徐鍇の原本だとすると、この傳本が基づく韻書のおおよその系統については、徐鉉が原本に寄せた序「韵譜前序」が参考になる。ここに「命鍇取叔重所記，以切韻次之。」と述べてあり、少なくとも十卷本所據の韻書は切韻系韻書であったことがわかる。では、ここで言う「切韻」とは何を指すのであろうか。これについての初めての言及は『四庫全書總目提要』に見られ、「所謂以切韻次之者即陸法言書，即唐韻廣韻所因也。」とある。ここで言う「陸法言書」とは陸法言『切韻』を指すと思われるが、清・馮桂芬も同治甲子嘉平月吳縣馮氏縮摹篆文上版の十卷本『篆韵譜』に付した序において、この説に賛成している。これに對して、王國維「書小徐説文解字篆韵譜後」では「陸韻恭𧈧縱諸字皆在冬韻，孫愐改入鍾韻，今小徐譜中恭𧈧二字在鍾韻，縱字在用韻，即用孫説，是所據者非陸韻明矣。」とこれに反論を加えている。そしておそらく王國維のこの記述に基づいて、藤堂明保 1980，P 100 や、張世祿 1977，P 92 では、十卷本所據韻書は孫愐『唐韻』であるとしているが、王國維はそこまで言明しておらず、陸法言『切韻』ではないことを明かにしただけである。王國維は別の著作（「書古文四聲韻後」）の中でも「小徐所據切韻」という言い方をしている。

2. 十卷本に見られる『唐韻』的特徴

ところで王國維「唐韻別本考」でも指摘されているように、唐代後半には『唐韻』の異本が多く流布していたことが知られているが、今日完全な形で傳わる『唐韻』をひとつとして見ることはできない。それら『唐韻』異本の直接的な資料としては、去聲の一部と入聲を残すいわゆる「唐韻殘卷」（蔣斧舊藏）と、東韻の一部を残す P 2018⁽¹⁾ があるだけであるが、この他種々の『唐韻』の姿を窺い知ることができる資料として、自家所藏の『唐韻』の概要を紹介した宋・魏了翁「唐韻後序」や、編纂時になんらかの形で『唐韻』を利用している大徐本⁽²⁾、宋・夏竦『古文四聲韻』⁽³⁾を挙げることができる。また、「唐韻殘卷」の系統に連なるものとして宋・陳彭年撰『大宋重修廣韻』がある。そして、王國維が十卷本には孫愐の説が取り入れられているということの根據「陸韻恭

蝨縱諸字皆在多韻，孫愐改入鍾韻。」という時のこの孫愐の特徴とは、實は大徐本で「恭」「蝨」「縱」三字の反切下字が鍾韻の字になっていることによって知られるものである⁽⁴⁾。つまり、「恭」「蝨」「縱」三字に関して、大徐本所據の『唐韻』と十卷本の状況がほぼ同じになっていることから、十卷本所據切韻系韻書には孫愐の説が見られる、と言っているわけである。この特徴は、大徐本以外にも、同じく『唐韻』に關係するP2018、『古文四聲韻』、『廣韻』にも見られるものであるから、『唐韻』的な特徴と言っても差し支えないと思われる。

では、十卷本にはこれ以外にどんな『唐韻』的な特徴が見られるのであろうか。それを知る爲に、それぞれの資料に見られる特徴を表にして十卷本と比較してみた。ただしここに挙げた特徴は、十卷本も含めて二種類以上の資料にあてはまるもので、一つの資料にしか見られない個別的なものは除いてある。(表中?は該當箇所を缺くことを示す。)

<表1>

特 徴

- a. 「恭」「蝨」が鍾韻，「縱」が用韻にある。
- b. 眞諄，寒桓，歌戈韻を分かť。
- c. 仙宣韻を分かť。
- d. 齊移韻を分かť。
- e. 東韻「隆」字を避諱⁽⁵⁾。(「隆」は玄宗の諱。)
- f. 翰韻「旦」字を避諱⁽⁶⁾。(「旦」は睿宗の諱。)
- g. 從母に「藏」字を用いる⁽⁷⁾。

	十卷	蔣斧	2018	徐鉉	夏竦	魏了翁	廣韻	王三
a	○	?	○	○	○	?	○	×
b	○	○ ⁽⁸⁾	?	?	○	○	○	×
c	○	?	?	?	○	?	×	×
d	×	?	?	?	○	○	×	×
e	○	○	?	○	?	?	○	×
f	○	?	?	○	?	?	○	×
g	○	○	?	○	?	?	○	×

a～gが切韻系韻書の傳統的な特徴ではないことは、右端に參考として挙げた王三(完本王韻)の状況を見るとわかる。そして十卷本はと言えば、dの齊移韻を分かťという条件には當てはまらないものの、この他の特徴は皆備えて

いることが見てとれる。したがって十卷本所據韻書は、いく種類かの『唐韻』と稱する韻書の特徴をかなり備えた、いわば『唐韻』系の書であるということになろう。

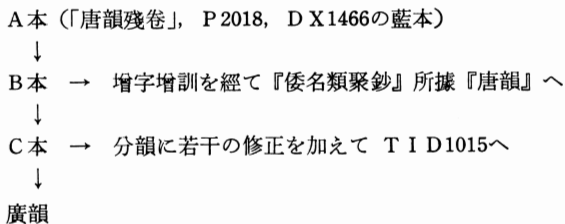
3. 「唐韻殘卷」、『廣韻』との関係

次に十卷本と「唐韻殘卷」および『廣韻』との関係について考察するが、その前にまず「唐韻殘卷」と『廣韻』の関係について確認しておく。この問題については、中村1991で詳しく論じており、「唐韻殘卷」について

- ・孫愐『唐韻』以降の『唐韻』の異本の一つである。
- ・『倭名類聚鈔』所據『唐韻』とも別書である。
- ・屋韻の訓義を調べた結果、九割以上が『廣韻』と一致している。

という三點を指摘した後、「唐韻殘卷」と『廣韻』の関係を圖1の様に位置づけている。なお、この圖でA本とB本のように縦に繋がっているものは、それぞれ若干の改訂や増補はあっても、その中核となる部分を變えずに繼承していく関係を示している⁹⁾。

<圖1>



「唐韻殘卷」、『廣韻』がこのような位置関係にあることを前提にすると、十卷本のこの二書との関係はどのようなものになるのだろうか。徐鍇が原本『篆韵譜』を編纂したのは南唐であるから、當然『廣韻』はまだ無い。また十卷本では覃談韻を陽唐韻の前に、蒸登韻を鹽沾韻の後に配列しており、これは『廣韻』より古い韻序であるから、時代的にも系統的にも十卷本が『廣韻』より前に位置することは確かである。したがって問題は、「唐韻殘卷」よりも前になるのか後になるのかということになる。これを考察するにあたって、十卷本の訓義は大多数が『説文解字』のそれなので「唐韻殘卷」や『廣韻』と比較の

仕様が無い爲、ここでは反切の比較をおこなった。

まず「唐韻殘卷」の殘存部分である去聲の一部と入聲の部分について、「唐韻殘卷」および『廣韻』と十卷本との反切の一致率を調べたところ、以下のようになった。

<表 2>

	去 聲	入 聲
十 卷 本 小 韻 數	527	509
唐 韻 殘 卷	65% (329/508)	68% (327/480)
廣 韻	72% (369/508)	74% (372/509)

兩書とも七割前後の一致率であるが、『廣韻』のほうがわずかながら高くなっている。

だがこれだけでは何とも言い難いので、次に「唐韻殘卷」の段階では見られない、いわば「唐韻殘卷」以降の要素が、十卷本の中に見られないかどうかを調べてみた。その結果例に挙げたように、十卷本の反切が「唐韻殘卷」とは一致せず『廣韻』とのみ一致するものが、去聲に12例、入聲に14例あった。

(なお王三『唐韻』『廣韻』は上田1975の、十卷本は上田1984の校勘に従う。以下同。)

<例>

韻	被注字	王 三	十卷本	唐 韻	廣 韻
御	飢	於 據	依 倨	衣 倨	依 倨
泰	褓	七 最	麤 最	七 最	麤 最
祭	衛	爲 剝	于 歲	于 剝	于 歲
怪	憊	蒲 界	蒲 拜	蒲 拜	蒲 拜
代	礙	五 愛	五 溉	五 槩	五 溉
換	象	他 亂	通 貫	通 亂	通 貫
欄	辯	薄 覓	蒲 覓	蒲 覓	蒲 覓
霰	霰	蘇 見	蘇 佃	蘇 甸	蘇 佃
笑	照	之 笑	之 少	之 妙	之 少
禡	吒	陟 訝	陟 駕	陟 嫁	陟 駕
沁	譌	側 禁	莊 蔭	莊 蔭	莊 蔭

證	證	諸	應	諸	應	諸	應
屋	穀	古	古	古	古	古	古
術	煖	翠	倉	倉	倉	倉	倉
月	歇	許	許	許	許	許	許
月	訃	居	居	居	居	居	居
沒	訥	諾	內	奴	奴	奴	奴
沒	卒	則	臧	臧	臧	臧	臧
沒	猝	龜	倉	倉	倉	倉	倉
末	末	莫	莫	莫	莫	莫	莫
屑	瞥	普	普	普	普	普	普
辭	列	良	良	良	良	良	良
錫	覓	莫	莫	莫	莫	莫	莫
麥	策	側	楚	楚	楚	楚	楚
麥	瞿	口	楷	口	楷	口	楷
合	合	胡	侯	胡	侯	胡	侯

また、「唐韻殘卷」では未收字だが『廣韻』では所收字で、更に反切も一致するものは、去聲に1例、入聲に2例あった。

<例>

韻	被注字	王 三	十卷本	唐 韻	廣 韻
祭	澈	(未 收)	匹 蔽 * 切二, 切三, P 3799も未收	(未 收)	匹 蔽
緝	熠	(未 收)	羊 入 * 切三, 王二も未收	(未 收)	羊 入
黠	苗	(未 收)	鄒 滑 * 王一, 王二, P 3696-2も未收	(未 收)	鄒 滑

この他、反切のみ一致するものが1例ある。

麥<廣韻> 广	(未 收)	尼 尼	(未 收)	尼 尼
<十卷本> 擲		* P 5531-4 女厄		

これらの反切はどれも王三等「唐韻殘卷」以前の韻書でも不一致または未收であるから（しかもこれらはどれも『廣韻』で韻末にあり、「唐韻殘卷」よりも後の段階で増加された文字である）、これが『廣韻』と一致する十卷本所據の韻書は「唐韻殘卷」よりも後に位置するということになる^四。

では、十卷本所據の韻書は「唐韻殘卷」以降のどこに位置するのであろう

か。上に挙げた系統圖で、「唐韻殘卷」から『廣韻』にかけてのライン上にあるのであろうか。それとも『倭名類聚鈔』所據『唐韻』のように幾分ずれた位置になるのであろうか。以下これを明らかにする爲に、王三から『廣韻』まで改變されずに繼承された切韻系韻書の傳統的な反切が、十卷本ではどのくらい使用されているのかを調べる。調査の対象になる反切は、當然王三と『廣韻』で同じになっているわけであるが、これに「唐韻殘卷」を加えて、十卷本と比べてみた。

<表 3>

	王 三	十卷本	唐 韻	廣 韻	去 聲	入 聲	計
a.	○	×	○	○	67	81	148
b.	○	○	×	○	4	11	15
c.	○	×	×	○	1	2	3

<例>

	韻	被注字	王 三	十卷本	唐 韻	廣 韻
a.	怪	噫	烏界	憶界	烏界	烏界
	廢	廢	方肺	方未	方肺	方肺
	月	伐	房越	房曰	房越	房越
	曷	刺	盧達	來達	盧達	盧達
b.	暮	怒	乃故	乃故	奴故	乃故
	祭	蟲	此芮	此芮	昌芮	此芮
	笑	獠	力照	力照	力召	力照
	證	鄉	許應	許應	許膺	許應
	屋	菊	居六	居六	居竹	居六
	沃	僕	蒲沃	蒲沃	蒲沃	蒲沃
	燭	粟	相玉	相玉	相足	相玉
	覺	雹	蒲角	蒲角	蒲角 [△]	蒲角
	末	跋	蒲撥	蒲撥	蒲撥 [△]	蒲撥
	屑	蟹	蒲結	蒲結	蒲結	蒲結
	屑	血	呼決	呼決	呼缺 [△]	呼決
	陌	頡	五陌	五陌	五伯	五陌
	昔	革	房益	房益	旁益	房益
	合	納	奴苔	奴苔	奴合	奴苔
	業	腌	於業	於業	於劫 [△]	於業
c.	宥	廬	力救	力究	力究	力救
	緝	十	是執	是汁	楚執	是執
	合	市	子苔	子合	子合	子苔

* a 以外はすべての例を挙げる。なお反切の右上に△を付したものは王二と同じ。

表3の中で、○は伝統的な反切を表し、×は伝統的な反切を継承していないことを表す。aの段は十卷本だけ伝統的な反切を継承していないものについてであるが、これは計148例ある。この数が相当多いということは、bの段の「唐韻殘卷」だけ×になっているものが、わずか15例しかないことと比べるとよくわかる。前掲の中村1991に「訓義の一致度を調べることは單に訓義だけの問題ではなく、他の諸特徴をも含めた全體的な近似度をとらえる手掛かりにもなるわけである。」とあるが、これは訓義についてだけではなく、伝統的な反切の継承度についても言えると思われる。したがって、「唐韻殘卷」や『廣韻』に比して、飛び抜けて伝統的な反切の継承度が低い十卷本所據の韻書はこの二書を結ぶラインからずれた所に位置すると考える。

4. 十卷本反切用字の特徴

次に伝統的な反切に限らず、十卷本が「唐韻殘卷」および『廣韻』と異なっている反切を詳細に検討してみると、この反切の相違は音系上の理由に據るものではなく、多くの場合に特定の反切用字が原因になっていることがわかる。

反切下字では、宥韻の例が最も顕著である。下に挙げる例のaを見ると、「唐韻殘卷」と『廣韻』では下字は「救」であるが、十卷本では「究」になっている。同様の例は、表4にあるように計12例ある。また例のb、cでは、兩書が「祐」で統一しているものを、十卷本では「右」と「又」にしており、このような例は5例ある。そして、「救」と「究」の場合も「祐」と「右」、「又」の場合も、上字は一例を除いて同じで、異なるのは下字のみである。

<表4>

下 字	王 三	唐韻殘卷	廣 韻	十卷本
究	1	1	0	12
救	15	12	14	2
		* 唐韻殘卷殘缺 1		
右	0	0	0	2
又	0	0	0	3
祐	4	5	5	0

<例>

	被注字	王	三	唐韻殘卷	廣	韻	十卷本
a	秀	息	救	息	救	息	究
b	救	久	祐	居	祐	居	右
c	瘦	所	救	所	祐	所	又

十卷本の反切下字が韻の大部分で他の書と異なっている現象は、去聲と入聲ではこの他にも霰韻、豔韻、轄韻等に見られる。

<例>

- ・霰韻 『廣韻』は「旬」を多用しているが、十卷本はこれを用いていない。

	被注字	王	三	唐韻殘卷	廣	韻	十卷本
	練	落	見	郎	旬	郎	電
	荐	存	見	存	旬	存	佃
	薦	作	旬	作	旬	作	節

- ・豔韻 『廣韻』で「豔」を用いる所に十卷本は「𩇑」を用いている。

	𩇑	七	瞻	七	𩇑	七	𩇑
	占	支	豔	章	𩇑	章	𩇑
	𩇑	丑	厭	勅	𩇑	丑	𩇑

- ・轄韻 十卷本は『廣韻』で用いていない「轄」を用いている。

	刮	古	頰	古	頰	古	轄
	闕	乙	轄	乙	轄	乙	轄

反切上字では、匣母の用字に特徴がある。十卷本全體における匣母の反切上字の使用回数を数えると「乎」が最も多く、「戸」「胡」と続く。

<十卷本> 乎 52 戸 30 胡 19 下 4 侯 4 黃 2 很 1

これを『廣韻』での状況と比べると、『廣韻』では「胡」の使用回数が圧倒的に多く、「乎」はわずか2回しか使用されていない。また、王三では「乎」は一回も使われていず、他の用字も『廣韻』と同様な傾向になっているので、十卷本よりも『廣韻』のほうが伝統的な反切上字の使用状況ということになる⁴¹⁾。

<廣韻> 胡 90 戸 32 下 14 侯 6 何 2 黃 2 乎 2

獲 1 懷 1

以上から、十卷本における匣母の反切上字のおおまかな傾向がわかるが、十卷本と『廣韻』では小韻總数が異なるので、一概に論じることはできない。そ

こで、次に反切上字の胡と乎に限ってその使用状況を調べてみた。

<表5>

廣 韻	十卷本	平	上	去	入	計
胡 ↔ 胡		7	8	2	1	18
胡 ↔ 乎		7	10	19	14	50
胡 ↔ 莖		0	1	0	0	1
胡 ↔ 下		0	0	1	0	1
胡 ↔ 戸		0	0	1	0	1
戸 ↔ 胡		1	0	0	0	1
戸 ↔ 乎		1	0	0	0	1
乎 ↔ 乎		1	0	0	0	1

<例>

韻	被注字	廣 韻	十卷本
豪	豪	胡 刀	乎 刀
登	恒	胡 登	乎 登
海	亥	胡 改	乎 改
緩	緩	胡 管	乎 管
效	效	胡 教	乎 教
号	号	胡 到	乎 到
黠	黠	胡 八	乎 八
屑	頤	胡 結	乎 結

表5は、『廣韻』も十卷本も「胡」を用いているものが計18あるということ等を表しているが、『廣韻』では「胡」を用いているが十卷本では「乎」を用いているものは計50になっている。十卷本での「乎」の使用数は全部で52であるから、この大多数は伝統的な切韻系韻書で「胡」を上字とするものに由来していることがわかる。また例を見るとわかるが、この場合に異なるのは上字だけで下字は兩書とも同じであるから、なんらかの理由があって「胡」を避ける傾向にあるということになる。けれども、「胡」を避けた後に「乎」が選ばれたのは、匣母の反切用字の中で唯一「胡」と同音（匣母模韻一等）の文字であったからであろうということは推測できても、避諱でもないのになぜ「胡」が避けられる傾向にあるのか、その理由は現時点では不明である。なお、この

「胡」を避けて「乎」を用いる傾向は、模韻の反切下字にも見られるので、偶然の事とは思われない⁽¹²⁾。

・模韻の反切下字

被注字	十卷本	廣 韻
盧	落 乎	落 胡
迥	昨 乎	昨 胡
孤	古 乎	古 胡
徐	他 乎	他 胡

5. 『唐韻』佚文との比較

ここまでで、十卷本所據韻書と『廣韻』、『唐韻殘卷』とのおよその位置関係が明かになったわけであるが、前掲の中村氏の圖では、十卷本所據韻書と同じように『廣韻』と『唐韻殘卷』からずれた位置に『倭名類聚鈔』所據『唐韻』がある。十卷本所據韻書はこの『倭名類聚鈔』所據『唐韻』とは関係があるのであろうか、どうなのであろうか。ここでは、『倭名類聚鈔』所引『唐韻』佚文の反切計 162 を十卷本および『廣韻』と比べ、一致の度合いを調べて見た。(表 6) その結果、十卷本と一致するものは 111 であるのに對して、『廣韻』と一致するものは 143 あり、『倭名類聚鈔』所引『唐韻』は、むしろ『廣韻』の反切とのほうが一致率が高くなっている。更にサンプル数は少ないが、『倭名類聚鈔』に引く以外の『唐韻』の佚文も調べてみたが、この場合もどちらかといえば『廣韻』と一致するもののほうが多くなっている。

<表 6>

	計	十卷本	『廣 韻』
倭名類聚鈔	162	111	143
大乘理趣六波羅釋文	22	17	18
悉曇要訣	22	12	17
菩提場所說一字頂輪王經略義釋	16	11	13
佛說觀普賢菩薩行法經記	16	13	15

* 『唐韻』の佚文はすべて上田正1984による。また、『唐韻』の佚文の見られる書はここで扱った以外にもあるが、ここでは合計が10以上のものに限った。

また、『倭名類聚鈔』『菩提場所說一字頂輪王經略義釋』には匣母字の反切が残っているが、少なくともここからは十卷本のように「乎」を多用するという

傾向を窺い知ることはできず、どれも伝統的な反切用字「胡」になっている。

韻	被注字	倭 名	菩 提	十卷本	廣 韻
暮	苙	胡 誤	=====	乎 誤	胡 誤
霽	系	胡 計	=====	乎 計	胡 計
麥	畫	=====	胡 麥	乎 麥	胡 麥

* ーは該當箇所がないことを示す。

以上の事から、『倭名類聚鈔』所引『唐韻』もその他の書に引かれた『唐韻』も、十卷本所據の韻書と同一書ではなく、その反切も十卷本よりは『廣韻』に近いものだということがわかる。

6. 大徐本との比較

前述したように、大徐本はその編纂時に『唐韻』の異本のひとつに據っていることが知られている。この兄徐鉉自身が大徐本編纂時に使用した『唐韻』の一版本と、『篆韻譜』の原本編纂時に弟徐鍇に使用するように命じた切韻系韻書とはなんらかの関係があることが豫想される。そこで、十卷本と大徐本の反切の比較調査をおこなった。ただし大徐本の反切については、上田正1984で同一音節に數種類の反切が存在すると述べられており、また嚴學窘1936では二等重韻の併合等が指摘されており、構成が非常に複雑であることが窺い知られる。そこで、現時点ではごくおおまかな調査をおこなうに止める。

まず上聲と去聲の一致率を調べると、去聲 65 %、入聲 73 %で、「唐韻殘卷」『廣韻』と同様に七割前後の一致となった。けれども、大徐本における伝統的
反切の繼承状況を見るとわかるように、大徐本所據『唐韻』は、十卷本等と同じように「唐韻殘卷」から『廣韻』にかけての線上には乗らないようである。表7にあるように大徐本だけ伝統的
反切を繼承していないものが多數存在するからである。

<表7>

王 三	唐 韻	大徐本	廣 韻	去 聲	入 聲	計
○	○	×	○	66	62	128

<例>

韻	被注字	王 三	唐 韻	大徐本	廣 韻
質	匹	譬 吉	譬 吉	普 吉	譬 吉

となると、大徐本は十卷本の反切との一致率が「唐韻殘卷」『廣韻』と同じくらいでも、當然實際に一致している反切の中には、「唐韻殘卷」等と重ならない部分があることになる。そこで次に十卷本において大徐本としか一致しない反切が、具體的には全體でどのくらいあるのか調べて見た。表8で異なる記號は異なる反切を表しているが、十卷本と大徐本だけしか一致しないものが合計51あることがわかる。

<表 8>

王 三	唐 韻	十卷本	大徐本	廣 韻	去 聲	入 聲	計
○	○	×	×	○	19	14	33
○	◎	×	×	◎	11	7	18
合 計					30	21	51

<例>

韻	被注字	王 三	唐 韻	十卷本	大徐本	廣 韻
勁	併	卑 正	卑 正	卑 政	卑 政	卑 正
宥	岫	似 祐	似 祐	似 又	似 又	似 祐
聿	律	呂 卹	呂 卹	呂 戊	呂 戊	呂 卹
職	職	之 翼	之 翼	之 弋	之 弋	之 翼

既に指摘されているように⁽¹⁴⁾、反切の一致と言うのは偶然ではなかなか起こり難いことであるから、これだけまとまった数の反切の一致が見られる十卷本所據韻書と大徐本所據『唐韻』は、その成立の過程で独自の接点を持っていた可能性があると思われる。

もちろんこの二書だけに共通の反切が見られる理由をそれぞれの所據韻書にまで遡らずに、小川環樹博士の説に立って十卷本の段階で徐鉉の手が加わっており、その編纂時に大徐本が用いられたからだとも考えることもできよう。しかし既に拙稿1990で述べたように、十卷本においては小篆にも訓注にも大徐本を用いた改訂の跡は見られないし、増訂時に徐鉉が使用したという李舟『切韻』の反切も五卷本には見られるが十卷本には見られない。このように、十卷本には多くの点で徐鉉の手が加わっていないことがわかっている。従って十卷本と大徐本だけに共通の反切が存在する理由を、小川環樹博士の説に據って十卷本編纂時に大徐本が利用されたとは考えずに、それぞれが據った韻書に共通点が

あったのだと考えるわけである。

なお、小川環樹博士の説では、五卷本における増訂時に『廣韻』が用いられたということであるが、この51例の中で、五卷本の段階で『廣韻』と同じ反切に改められているものはわずか4例にすぎず、それ以外は、ほぼ『廣韻』による改変を受けずに五卷本にそのまま受け継がれている⁴⁴⁾。もし『廣韻』を用いているならば、この部分においてももっと『廣韻』の影響が見られてもよいと思われる。これに對して拙稿1990では、五卷本における増訂時に用いられたのは大徐本と李舟『切韻』であると想定したが、この説に據れば十卷本で大徐本と一致する反切を、増訂時に改変せずに残した理由が説明できる。

おわりに

以上十卷本の反切を「唐韻殘卷」、『廣韻』、『唐韻』佚文、大徐本と比較對照することによって、十卷本所據の韻書の性格を考察した。その結果、得られたのは次の諸點である。

- ・十卷本には『唐韻』的要素が多く見られ、據ったのは『唐韻』の異本の一つであった可能性がある。
- ・十卷本所據書は、「唐韻殘卷」よりも後に位置する。
- ・十卷本所據書は、「唐韻殘卷」から『廣韻』にかけての線上より幾分ずれた場所に位置する。
- ・十卷本所據書は、大徐本所據『唐韻』と独自の接點があった可能性がある。

ただし、これで十卷本所據韻書についての調査は充分におこなわれたというわけではない。特に大徐本との關係については、前述のように大徐本自體の反切にまだ検討の餘地があるので、今後はこれを充分に分析調査し、更に研究を深める必要があると思われる。

また十卷本の反切の中には、徐鍇が十卷本編纂時に據りどころにした『説文解字』にもともと付されていた反切が含まれている可能性もないわけではないが、この點については今後の課題としたい。

注

- (1) この殘卷は、上田正1973で「唐韻殘卷」と同類の書だということが考證されている。
- (2) 卷十五下徐鉉序に「今並以孫愐『唐韻』音切爲定」とある。
- (3) 夏竦序に「準『唐切韻』分爲四聲」とあり、王國維はこの『唐切韻』について「夏公英四聲韻所據之唐切韻與唐韻相去尤近，卽視爲唐韻別本，爲後人增加者，亦無不可也。」と述べている。
- (4) 「書吳縣蔣氏藏唐寫本唐韻後」参照。
- (5) 周祖謨 1983, p 910-p 911。
- (6) 上田正 1975, p 153。
- (7) 周祖謨 1983, p 910。
- (8) 平聲，上聲は殘缺。去聲，入聲による。
- (9) なお，孫愐『唐韻』については王國維以來，開元本とその増訂本である天寶本の二種類があるとされていたが，中村1991ではこの説を疑い，孫愐は開元年間に『唐韻』を作っただけで増訂本を編纂した證據はないと論じている。
- (10) ちなみに「唐韻殘卷」とのみ一致し，『廣韻』と王三等と不一致のものは，去聲 8 入聲 1 ある。また「唐韻殘卷」が十卷本の反切と一致するものの中には，『廣韻』で未收になっているものはない。

<例>

韻	被注字	王 三	十卷本	唐 韻	廣 韻
御	御	魚 據	牛 據	牛 據	牛 倨
御	慮	力 據	良 據	良 據	良 倨
御	洳	而 據	人 庶	人 庶	人 恕
換	喚	呼 段	呼 貫	呼 貫	火 貫
翰	粲	倉 旦	倉 案	倉 案	蒼 案
霰	電	堂 見	唐 練	唐 練	堂 練
霰	片	普 見	普 眇	普 眇	普 麵
笑	召	直 笑	直 少	直 少	直 照
覺	學	戶 角	胡 角	胡 角	胡 覺

- (11) 『廣韻』の反切上字の統計は陸志韋 1939 に據る。また，王三については董同龢 1952 に據る。
- (12) 『廣韻』『古文四聲韻』の韻目に付された反切でも「乎」を多用しているが，十卷本とは一致しない。
- (13) 慶谷 1973, 古屋 1984参照。
- (14) やや特殊な例として次のようなものがある。

霰韻「練」十卷本：郎電反，五卷本：郎旬切，大徐本：郎電反と郎旬反，『廣韻』郎旬切

禡韻「譏」十卷本：詞夜反，五卷本：辭夜反，大徐本：詞夜反と辭夜反，『廣韻』：辭夜反

また、點韻「寤」は五卷本に未收。

参考文献

- 『說文解字篆韻譜』（天理圖書館善本叢書，四部叢刊，小學彙函，函海，同治甲子嘉平月吳懸馮桂芬縮摹篆文上版）
- 徐鉉『說文解字』（四庫善本叢書）
- 『徐公文集』（四部叢刊初編）
- 夏竦『古文四聲韻』（中華書局，1983年）
- 魏鶴山『鶴山先生大全集』（四部叢刊初編）
- 王國維『觀堂集林』（中華書局，1984年）
- 陸志韋 1939「證廣韻五十一聲類」（『燕京學報』25）
- 嚴學宥 1936「大徐本說文反切的音系」（『國學季刊』6-1）
- 董同龢 1952「全本王仁煦刊謬補缺切韻的反切上字」（『集刊』23下）
- 張世祿『廣韻研究』1977（香港太平書局）
- 周祖謨 1983『唐五代韻書集存』（中華書局）
- 上田正 1973『切韻殘卷諸本補正』（東京大學東洋文化研究所付屬東洋學文獻センター）
- 1975『切韻諸本反切總覽』（均社單刊第一）
- 1984『切韻佚文の研究』（汲古書院）
- 小川環樹 1980「說文篆韻譜と李舟切韻」（『ビブリア』75）
- 1983「論《說文解字篆韻譜》部次問題—《李舟〈切韻〉考》質疑—」（『語言研究』1983年第一期）
- 慶谷壽信 1973「敦煌出土の音韻資料（中）—首楞嚴經音の文獻學的考察—」（『東京都立大學人文學報』91）
- 藤堂明保 1980『中國語音韻論—その歷史的研究—』（光生館）
- 古屋昭弘 1984「王仁煦切韻と顧野王玉篇」（『東洋學報』第65卷第3・4號）
- 遠藤光暁 1990「『切韻』における稀少反切上字の分布」（『中國語學』237號）
- 中村雅之 1991「孫愐『唐韻』について」（『富山大學人文學部紀要』17號）
- 工藤早恵 1987「『說文解字篆韻譜』傳本考」（『中國語學』234號）
- 1990「十卷本『說文解字篆韻譜』について」（『東京都立大學人文學報』213號）